

松江藩医北尾家の系譜について

梶谷光弘

はじめに

これまで著者は、北尾家の医者としての側面を追求するために調査を行ってきたが、松江藩の御給帳や全国各地に残る門人帳の中にその名前を見ることに留まっていた⁽⁵⁾。

ところが、数年前、松江市の松村家において北海道札幌市在住（現在は北広島市在住。）の北尾研二氏と面会する機会を得、それが縁で家蔵されている大量の史料を借用・写真撮影することができた。

そこで今回は、医家としての北尾家研究の第一段階として、北尾家の出自とその系譜を明らかにする。

一 北尾研二氏からの書簡

松江藩の藩医であった北尾家については、これまで松江藩の松平斎齋に命じられて写真の器械を購入し、その技術を身に付けた北尾徳庵⁽¹⁾、江戸でまず西洋医学を学び、緒方洪庵や松本良順に学んだ後に長崎の精得館に派遣され、維新时期には、松江藩の医学教授兼病院長、「一等医」となった北尾漸一郎⁽²⁾、ベルリン大学とゲッチンゲン大学で物理学を学んだ後、東京大学などで教鞭をとる傍ら論文「地球上ノ大気ノ運動及颶風ノ理論」を発表し、国際的に認められた北尾次郎⁽³⁾らが知られていた。

最近になり、西脇宏氏や平賀英一郎氏、小松醇郎氏、大宮信光氏らの研究によって、北尾次郎の生涯をはじめ文学・芸術的な側面、数学・物理学・氣象学の功績などが明らかになった⁽⁴⁾。

平成十六年（二〇〇四）七月、北尾研二氏から次のような書簡を受け取った。

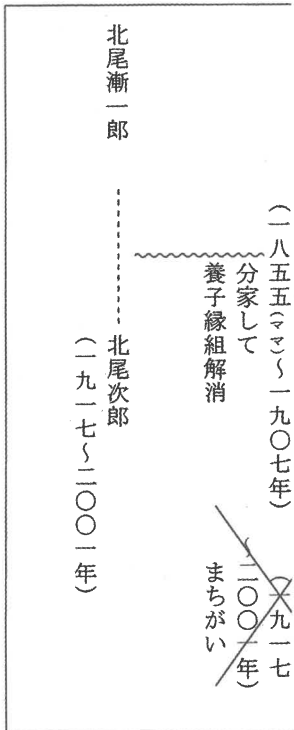
資料1 北尾研二氏からの書簡⁽⁶⁾ () 婚姻 養子 ()

北尾漸一郎……………北尾次郎

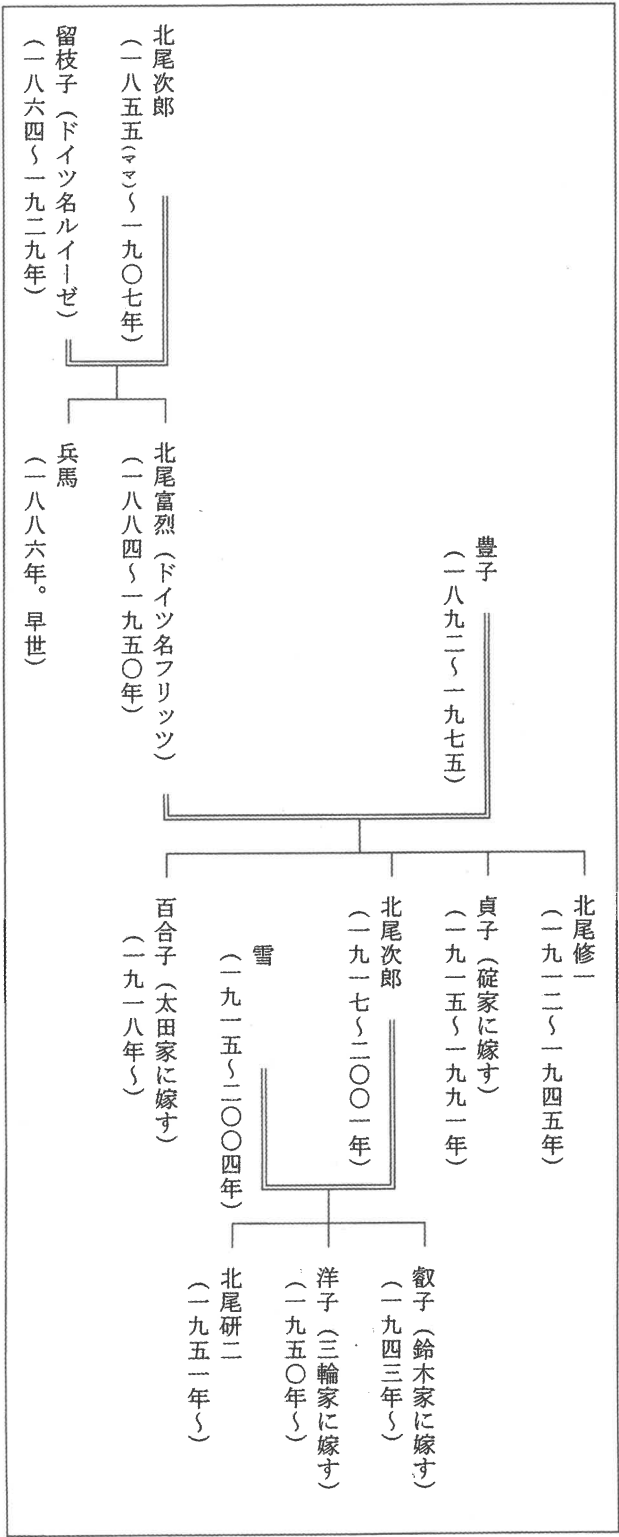
北尾次郎

北尾漸一郎は「八世徳庵」、北尾次郎は「九世徳庵」だと、父（北尾次郎、一九一七〜二〇〇一年）から聞いています。

北尾次郎は（旧姓松村次郎・録次郎、一八五五〜一九〇七年）は、北尾漸一郎の養子になって、「九世徳庵」になったが、その後分家したため、本家の



後継はしばらくいなかったが、北尾次郎(一八五五マコ〜一九〇七年)の孫である私の父北尾次郎(一九一七〜二〇〇一年)が、北尾漸一郎の養子となって「九世徳庵」になったと聞いています。
 したがって、私の父北尾次郎(一九一七〜二〇〇一年)は、直接、北尾漸一郎の養子になったわけではありません。「北尾漸一郎は八世で、自分は九世(臭せー)だ。」と、父は冗談で言っていました。だとすると、系図は一代ずつさかのぼって、もう一代前(徳大夫豊包、多久家元祖)を、北尾家元祖と考えていたのかも知れません。
 なお、分家の北尾家は次のようです。



北尾富烈さんは日本人とドイツ人のハーフですので、父には四分の一、私には八分の一、ドイツ人の血が入っていることとなります。

北尾次郎(一八五五マコ〜一九〇七年)がドイツ人のルイーゼさん(留枝子、一八六四〜一九二九年)と結婚して富烈さんが生まれ、富烈さ

んは一人っこだったそうです(豊子さんの話)。(兵馬さんという弟がいたが、生後三日で死亡)。

富烈さんが豊子さんと結婚して、男二名、女二名が生まれ、私の父(北尾次郎、一九一七〜二〇〇一年)は次男でした。ドイツのルイーゼ(留枝子)さんが、もう一度、当時もう亡くなっていた夫の名前「次郎」という名前を呼びたいとのことで、私の父の名前も北尾次郎(一九一七〜二〇〇一年)となり、同姓同名でまぎらわしいことになりました。

また、次男だったので、分家北尾家は修一さんが継ぎ、父は本家の、当時まだ存命だった漸一郎さんの養子になって本家を継ぎました。

北尾研二氏の書簡の内容は、次の七点である。

①北尾漸一郎が「八世徳庵」であるため、「北尾家元祖」と「初世徳庵」は

「多久徳大夫豊包」であろう。

②北尾次郎(物理学者)は北尾漸一郎の養子となったが、その後、分家した。

③北尾次郎(物理学者)の孫で、北尾富烈の次男にあたる父が、直接、北尾漸一郎の養子となって「九世徳庵」を名乗った。

④曾祖父である北尾次郎(物理学者)の妻がドイツ人だったため、祖父(富烈)、父、私にはドイツ人の血が入っている。

⑤父が生まれた時、曾祖母(ルイーゼ)が亡き夫北尾次郎(物理学者)の名前を呼びたかったため、「次郎」と命名した。

⑥分家した北尾家は父の兄修一氏が嗣ぎ、次男だった父が本家の北尾漸一郎氏の養子となり、本家を嗣いだ。

⑦分家を嗣いだ北尾修一氏が亡くなったため、本家の養子となっていた父が本家と分家を一緒にした。

その後、一九四五年に修一さんが亡くなって、分家の後継者がいなくなり、父が本家も分家も、もう一緒にしていいだろうとのことで、玉窓寺にあった北尾家の二つの墓(本家と分家)を一つにまとめ、同時に松江・萬壽寺の十九霊位もおさめました。

このように、北尾次郎さん(一八五五〜一九〇七年)以降のことは比較的伝え聞いていますが、漸一郎さんやそれ以前のこととなると、ほとんどわかりません。

このうち①について、御尊父の北尾次郎氏は、「多久徳大夫豊包」が「初世徳庵」であると同時に「北尾家元祖」であると考えられている。

しかし、北尾研二氏所蔵の「多久氏系図」には、「玄斎」の上部に「北尾氏元祖」、下部に「若名角之助、松江二住居シテ医ヲ業トス、北尾徳庵ト号ス、北嶋ノ末ト言意ニテ北尾ト改」と書かれている。また、同氏所蔵の「御系図」二巻ともに「徳庵、若名覚之助、号浄徳庵主、妻、北嶋伝三娘、於松江業医、改北嶋ヲ号北尾ト」と書かれている。

つまり、系図上では、北尾玄斎が「北尾氏元祖」であり医家初代であるが、御尊父の北尾次郎氏の考えとは異なっている。

そこで、本稿では、「初世徳庵」と、「北尾氏元祖」・医家初代を分けて考え、多久徳大夫豊包も「徳庵」を号したであろうと考えて「初世徳庵」とし、「北尾氏元祖」・医家初代は北尾玄斎とする。

次に、②と③により、北尾次郎(物理学者)は一時期「九世徳庵」を名乗ったが養子縁組を解消して分家したため、その後養子となった父が「九世徳庵」を名乗ったのである。

④から⑦については、貴重な言い伝えである。

最後に、北尾研二氏が、「北尾次郎さん（物理学者）以降のことは比較的伝え聞いていますが、漸一郎さんやそれ以前のことになると、ほとんどわかりません。」と述べておられるように、江戸時代から明治時代初期にかけてのことは、北尾家においてさえもわかっていないのである。

二 北尾家の出自

と系譜

北尾家には「御系図」（巻物二巻）と「多久氏系図」（巻物一巻）が家藏されている。（写真1・2・3）前者は二巻とも「天照皇大神」から、後者は「天穂日命六十代国造北嶋利孝卿」から書き出されている。

それらを基にして北尾家の家系図を作成すると、次のようになる。

写真1 「御系図」

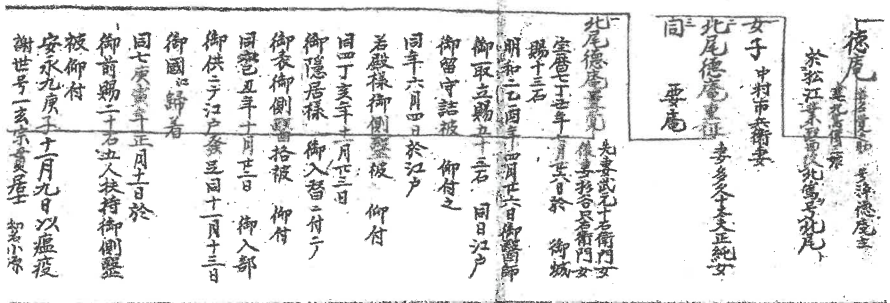


写真2 「御系図」

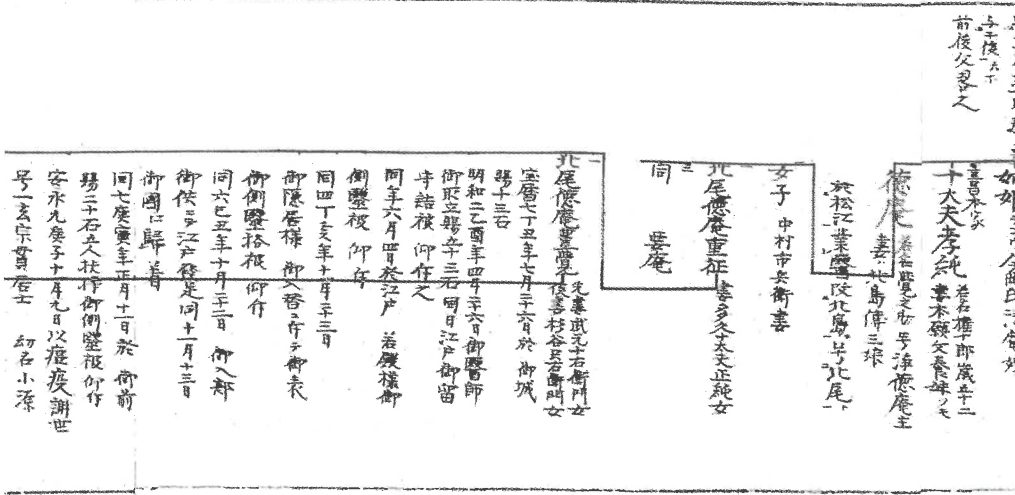
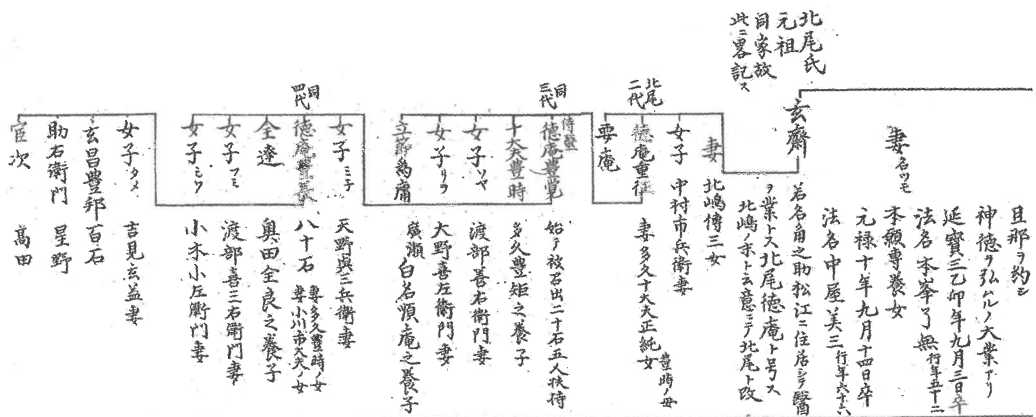
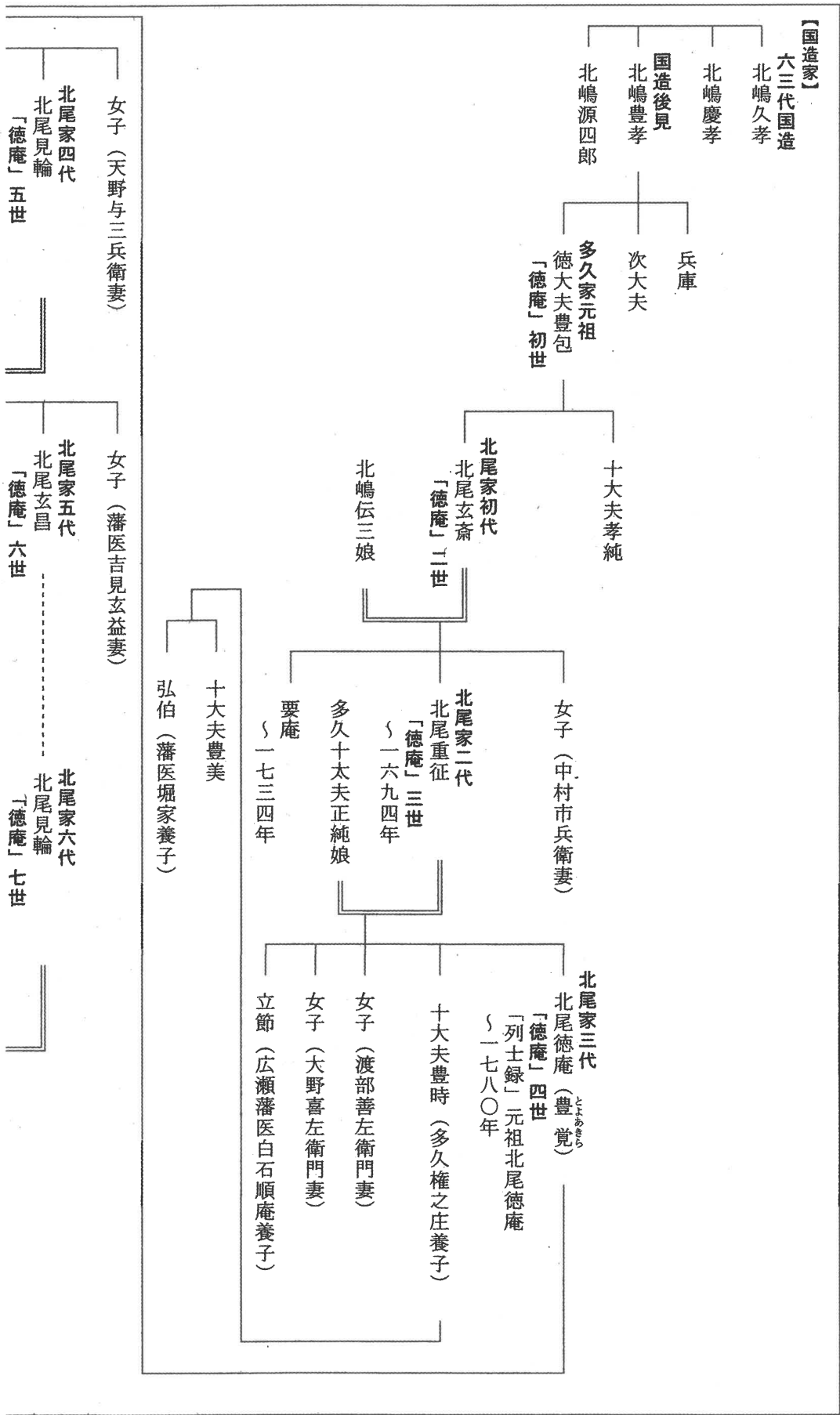


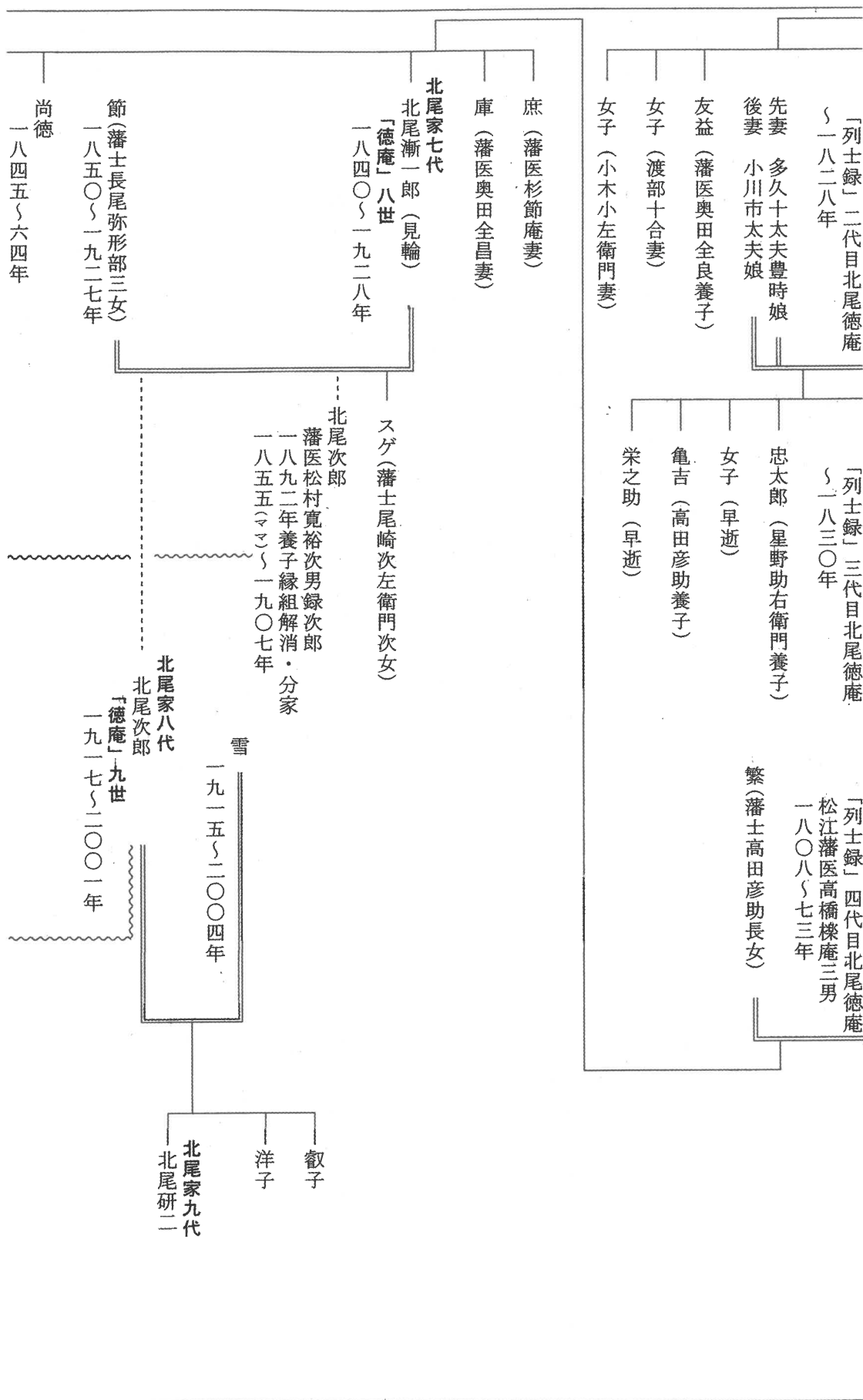
写真3 「多久氏系図」



資料2 北尾家の家系図(7) (婚姻) (実子) (養子)

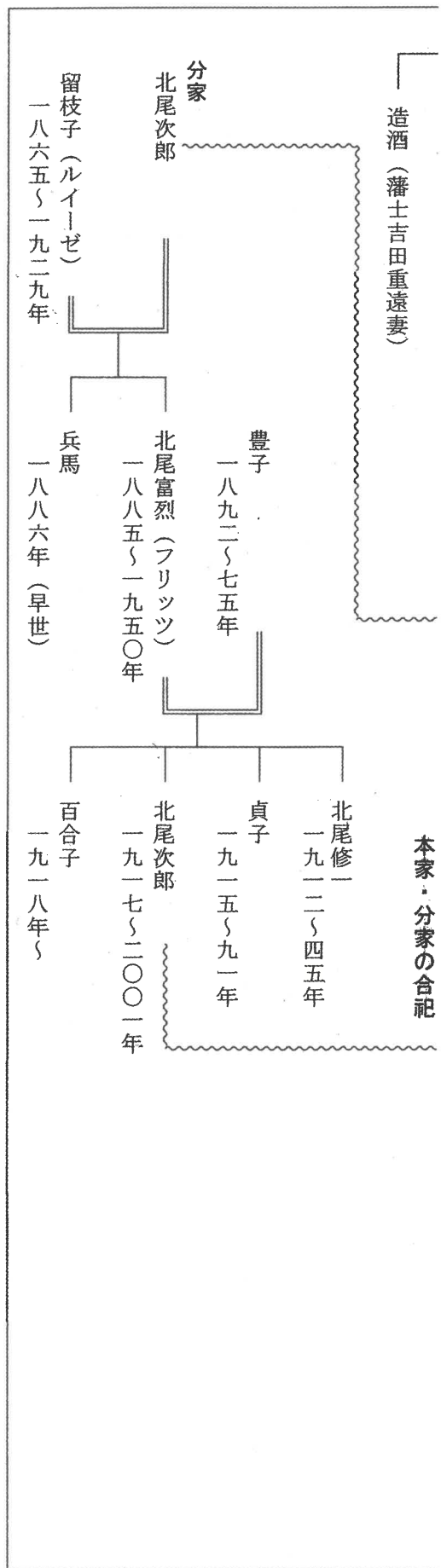


松江藩医北尾家の系譜について (梶谷)



造酒 (藩士吉田重遠妻)

本家・分家の合祀



三 北尾家の姻戚関係

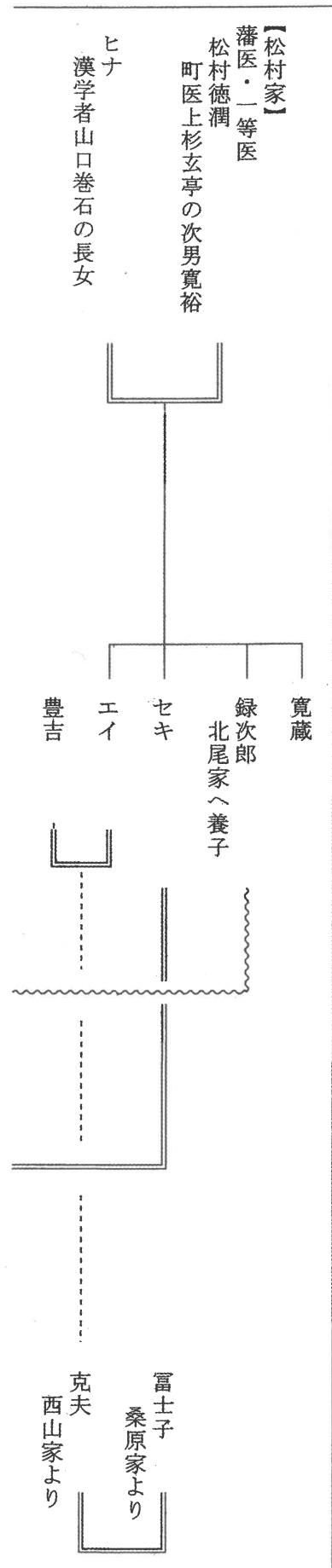
北尾家を取り巻く姻戚関係をまとめると、次のようになる。

資料3 北尾家を取り巻く養子縁組関係(8)

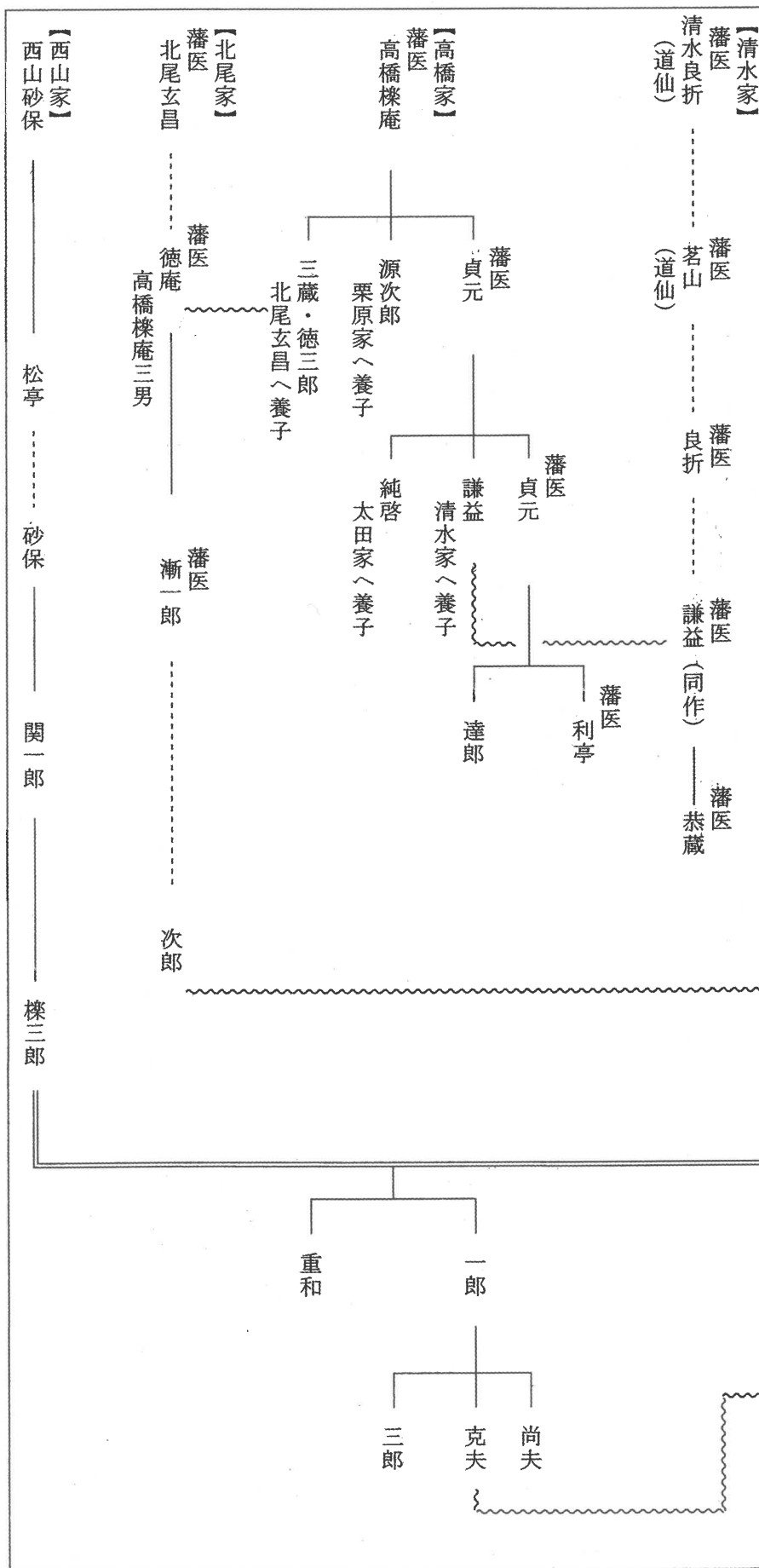
(〓 婚姻)

— 実子

..... 養子)



松江藩医北尾家の系譜について (梶谷)



これを見ると、北尾家は、藩医家であった松村家、清水家、高橋家、在村医家であった西山家と養子縁組等による親戚関係にあり、その一族は、積極的に藩外に出かけて医学修業を行い、優れた医術と学識を身に付け、松江藩の医学振興に寄与したのである。

そして、明治二年（一八六九）に開設された松江藩医学校の教授兼病院長には、長崎の精得館において西洋医学を学んで帰国した北尾漸一郎が抜擢さ

れ、その後の公立松江病院には、大阪病院でボードインから西洋医学を学んだ西山関一郎と松村寛蔵が初代院長（心得）、副病院長として活躍し、この一族が松江藩における西洋医学の導入に大きな役割を果たしていたのである。

には、長崎の精得館において西洋医学を学んで帰国した北尾漸一郎が抄撰と

まとめ

今回、北尾家の系譜を明らかにしたが、今後、北尾家はもとより姻戚関係にある松村家、清水家、高橋家、西山家、実業家であり美術工芸研究者でもあった桑原羊次郎家などに残る資料を基にして、在町医として活躍した北尾玄斎・重征、藩医として活躍した北尾豊覚・見輪・玄昌・見輪、西洋医学や洋学を志向した北尾漸一郎・尚徳、そうした土壌の中で育ち、世界的な数理学者をめざした北尾次郎の精神性について考察していきたいと考えている。

注

(1) 桑原羊次郎「松平斎翁の写真術」、『島根評論』四九〇五五頁、昭和七年。

(2) 文部省編『日本教育史資料二』四六四・四八四頁、一九〇三年。

米田正治『島根県医学史覚書』松江文庫二、一〇四三頁、一九七六年。

(3) 日本科学史学会編『日本科学技術大系』「帝国大学紀要理科」五七六〇五八〇頁、一九六四年。

脇田裕「北尾次郎」、島根県教育委員会『明治百年島根の百傑』二七四〇二八頁、昭和四三年。

池野誠「明治のわが国物理学界の鬼才」、島根新聞、島根の文化と人七、一九六六年。

「北尾次郎」、読売新聞「島根人物誌」十八、昭和五一年。

(4) 西脇宏・猿田量・若林一弘「知られざる北尾次郎—物理学者・小説家・画家—」、

島根大学汽水域研究センター『山陰地域研究』第五号、五七〇七四頁、平成元年。

西脇宏「北尾次郎『森の妖精』—翻刻と翻訳(一)—」、同『山陰地域研究』第八号、一〇二五頁、平成四年。

西脇宏「北尾次郎『森の妖精』—翻刻(二の二)—」、島根大学法文学部『島根大学法文学部文学科紀要』第十七号—II、一三三〇一五六頁、平成四年七月。

西脇宏「北尾次郎『森の妖精』—翻刻(二の二)—」、同『同』第十八号—II、一三九〇一七九頁、平成四年十二月。

西脇宏「北尾次郎『森の妖精』—翻刻(二の三)—」、同『同』第十九号—II、一〇九〇一三〇頁、平成五年七月。

西脇宏「北尾次郎『森の妖精』—翻刻(二の四)—」、同『同』第二〇号—II、一九〇一四二頁、平成五年十二月。

西脇宏「北尾次郎の手紙—紹介と翻刻—」、島根大学汽水域研究センター『山陰地域研究』第十号、一〇一十一頁、平成六年。

西脇宏「北尾次郎『おろかなミヒエル』について」、島根大学法文学部紀要言語文化学科編『島大言語文化』第五号、一一五〇一三六頁、平成十年七月。

西脇宏「桑原羊次郎著『北尾次郎博士の逸話』—紹介と翻刻—」、同『同』第六号、一一五〇一三六頁、平成十年十二月。

小松醇郎『幕末・明治初期数学者群像』(下) 明治初期編、三〇一〇三二四頁、平成三年。

平賀英一郎「北尾次郎の伝記的諸事実について」、森鷗外記念会『鷗外』六一号、五一〇九三頁、平成九年。

大宮信光「知られざる数理気象学の天才北尾次郎」、富士通『FUJITSU 飛翔』二一八〇三二頁、平成十年。

(5) 「列士録」北尾徳庵の項、島根県立図書館所蔵。
拙稿『日本教育史資料』所収『旧松江藩医学校』の記述検討(前編)、島根大

学教育学部附属中学校『研究紀要』第三五号、九五～一二四頁、平成五年。

拙稿「御給帳等からみた松江藩の藩医」、島根県古代文化センター『古代文化研究』第十一号、三九～六二頁、二〇〇三年。

拙稿「松江藩医学史において松平治郷（不昧）が果たした役割について―藩外の医学、儒学・漢学、国学、兵学の門人帳等を通して―」、同『同』第十二号、七五～一一六頁、二〇〇四年。

(6) 北尾次郎の生年については、これまでに著された論文等とは異なっているがそのままとし、(ママ)を付した。

(7) 「御系図」(巻物二卷) 北尾研二氏所蔵。

「多久氏系図」(巻物一巻) 北尾研二氏所蔵。

「萬寿寺墓地より改葬された北尾家先祖十九霊位」北尾研二氏所蔵。

拙稿「在村医の蘭学修業とその影響について」、山陰歴史研究会編『山陰史談』三十号、五五～八〇頁、平成十四年。

注(2) 『日本教育史資料二』。

注(5) 「列士録」。

注(5) 「松江藩医学史において松平治郷（不昧）が果たした役割について」。

(8) 「旧藩事蹟」 島根県立図書館所蔵。

米田正治『島根県医家列伝』山陰文化シリーズ四一、十一～十九頁、一九七二年。

同『島根県医学史覚書』松江文庫二、十一～十四頁、一九七六年。

同『近世日本島根医学史ノート』四四～九八頁、一九七七年。

同『続島根県医家列伝』松江文庫四、一四九～一五八頁、一九七八年。

「列士録」 北尾徳庵・高橋櫟庵・清水恭蔵・松村寛裕の項。

卜部忠治「華岡家門人西山砂保の足跡」一八〇～一九三頁、島根大学附属図書

館医学分館大森文庫出版編集委員会『華岡流医術の世界―華岡青洲とその門人たちの軌跡―』、二〇〇八年。

注(5) 『日本教育史資料』所収『旧松江藩医学史』の記述検討(前編)。

注(5) 「松江藩医学史において松平治郷（不昧）が果たした役割について」。

注(5) 「御給帳等からみた松江藩の藩医」。

注(7) 「在村医の蘭学修業とその影響について」。

謝辞

多くの資料を提供いただき、そして、その写真撮影を許可していただきました北尾研二氏に心よりはお礼を申し上げます。

また、事前に原稿を見ていただき、公表に理解をいただきました松村憲樹氏、清水正紀氏に紙面を借りてお礼を申し上げます。

(かじたに・みつひろ 松江歴史館専門官)